

医療経営士からの実践報告！

病院改善ケーススタディー

医療の質と経営の両立に向け 大学病院の病床削減を実行

長崎大学病院病院長／医療経営士2級 尾崎 誠さん

地域医療構想に伴う病床再編が全国で進むなか、大学病院も厳しい状況にある。長崎大学病院では医療の質と経営の両立を目指し、人員削減をせず98床の削減を実現。同院病院長の尾崎誠さんによる2025年の「全国医療経営士実践研究大会」神奈川大会の演題発表より、その取り組みを紹介する。

人口・患者数減少のなか 過剰な病床の削減に着手

当院は1861年創立の日本で最も長い歴史をもつ大学病院です。削減前の病床数は874床、高度急性期の一般病床が827床を占めていました。

当院のある長崎医療圏では、75歳以上の後期高齢者は今後も増加が見込まれる一方、前期高齢者以下の年代はすでに人口減少が始まっています。地域医療構想における長崎医療圏の高度急性期病床は必要病床数に対して257床も過剰と想定されており、その9割が大学病院です(図1)。人口規模が同等の鹿児島や人口が2〜3倍もある広島の大学病院と比べても、当院の病床数は明らかに過剰でした。

入院患者数は年間25万人、外来は40万人ほどですが、コロナ禍を機に減少したまま回復していません。実際はコロナが原因ではなく、すでに始まっていた患者数減少が表面化したのだろうと判断してい

ますが、結果として病床稼働率は回復せず、多い時には300床を超える空床がある状況でした。

また、当院は県内唯一の特定機能病院であり、地域医療の最後の砦です。求められる医療の質と経営の両立が大きな課題でした。

病床削減のきっかけは、循環器内科の重症患者のためのHCU(高度治療室)の設置です。従来の4床部屋3室計12床を8床のHCUに改修することになり、4床削減となりました。HCU設置には看護師の増員が必要となるため、1病棟(45床)を閉鎖して、そこからスタッフを回すこととしました。

加えて、病床数を10%以上削減すると1床あたり約200万円の補助金が得られる「地域医療介護総合確保基金」が活用できましたので、10%の病床削減を目途に検討を進めた結果、12の各病棟から原則1部屋(4床部屋)ずつの計48床+1床の49床を削減することとし、先に閉鎖を決定した49床と合わせ計98床の削減プランが固ま